法人名　国立研究開発法人国立精神・神経医療研究センター

参考資料5（見込評価）

評価項目	自己評価	アピールポイント
1-1	S	○NCNPから国産初の核酸医薬品創出：筋ジストロフィー治療薬先駆け審査指定制度対象品目のNS-065/NCNP-01が製造販売承認される （評価書7頁、26頁/説明資料9頁、10頁参照） ○視神経脊髄炎（NMO）の画期的治療：新規抗IL-6受容体抗体サトラリズマブの国際共同治験に成功 （評価書7頁、10頁、11頁、21頁、26頁/説明資料11頁、12頁参照） ○多発性硬化症（MS）の医師主導治験 （評価書7頁、10頁、11頁、21頁、26頁/説明資料11頁、12頁参照）
1-2	S	○治験・臨床研究の実施について （評価書39頁～43頁/説明資料16頁参照） ○バイオバンク、ブレインバンク事業 （評価書52頁～53頁/説明資料17頁～18頁参照） ○クリニカル・イノベーション・ネットワーク（CIN）の構築 （評価書53頁/説明資料19頁参照）
1-3	A	○希少神経難病症例の集積、専門的医療の提供、全国から集まる患者（第2中長期目標期間における初診患者の居住地）（評価書71頁～72頁/説明資料22頁参照） ○未診断疾患イニシアチブ（IRUD）におけるNCNPの役割 （評価書72頁～73頁/説明資料23頁～24頁参照） ○NCNPにおけるてんかんの診療と研究 （評価書73頁～74頁、82頁～83頁/説明資料25頁～26頁）
1-4	A	○リーダーとして活躍できる人材の育成、モデル的研修・講習の実施 （評価書94頁～99頁、99頁～102頁/説明資料29頁～31頁参照）
1-5	A	○国への政策提言に関する事項 （評価書104頁～109頁/説明資料34頁参照） ○薬物依存関係の取組み （評価書111頁/説明資料35頁参照） ○政策研究（地域精神医療）のこれまでの取組み （評価書111頁～112頁/説明資料36頁参照）

■2019 年 10 月 22 日　東京読売新聞　朝刊　22 ページ
［病院の実力］てんかん　薬が基本　専門医の受診を＝東京

薬が基本 専門医の受診を

病院の実力

てんかん

今回は、てんかん治療を取り上げた。脳の神経が過剰に興奮することで、一時的に意識を失うなどの発作が起きる。子どもから高齢者まで幅広い年代で発症し、患者数は100万人と推定される。

一覧表では、2018年の患者数など4項目を掲載した。

てんかん発作は、神経の興奮が起き始める場所や興奮の伝わり方によって症状が変わる。けいれんが起きる、手足がしびれる、吐き気がする、など様々だ。周りが気付かないような症状もある。

正確な診断から適切な治療につなげるため、専門医の受診が勧められる。脳神経外科、神経内科、精神科、小児科が主な受診先になる。

治療は、抗てんかん薬の服用が基本だ。1種類または複数の種類の薬を組み合わせることで7割の患者は発作を抑えられる。だが、残りの3割は薬が効きにくい難治性のてんかんだ。この場合、発作の原因となっている脳の一部を切除する外科手術も検討する。

地元のてんかん専門クリニックなどから、検査機器を備え、手術に対応できる病院を紹介されたり、症状が落ち着き、病院からクリニックに移ったりすることもある。そうした医療機関間の連携度合いを知る手がかりとして、他院に「紹介された患者数」「紹介された患者数」も掲載した。

全国の調査結果は16日の「安心の設計面」に掲載しました。

病院の実力「てんかん」

医療機関別2018年治療実績（読売新聞調べ）

医療機関名	患者数（人）	他院に紹介した患者数（件）	他院から紹介された患者数（件）	てんかん専門医の診療科 ①脳神経外科 ②神経内科 ③精神科 ④小児科
順天堂大	6561	104	404	①、②、④
国立精神・神経医療研究セ ◇	5692	1048	1049	①、②、③、④
昭和大	2539	—	—	①、④
森山記念	1448	—	—	①
東京大	1327	—	—	①、③
東京医大	1283	7	173	④
日本医大	1089	5	20	①、②、③、④
公立昭和	992※	166	97	①、②、④
豊島	966	78	58	④
青梅市立総合	904	—	—	③
東京女子医大東医療セ	719	59	81	④
慈恵医大葛飾医療セ	667	80	114	—
しのみやク	644	6	102	③
明理会中央総合	611	0	11	①
東海大八王子	411	58	59	②、④
東京医科歯科大	271	108	221	①、③、④
やまでらク	197	—	1	③
世田谷記念	193	2	30	①
東邦大大橋	160	7	62	—
稲城市立	133	5	23	①
同愛記念	88	—	—	—
ながきこどもク	32	2	4	④

「セ」はセンター、「ク」はクリニック、「—」は無回答または不明、◇はてんかん診療全国拠点機関、※は概数。

■新聞、雑誌等の記事は著作権法により、複製、転載には著作権者の許可が必要です。無断での複製、転載およびメールでの転送は行わないようにしてください。

薬物依存症に関する情報発信・啓発（H27～現在）

■2019年1月20日　日経新聞　朝刊　15面
薬物依存治療、普及道半ば

専門治療拠点 センター開設1年

薬物依存治療、普及道半ば

国立精神・神経医療研究センター（NCNP）が全国でも珍しい薬物依存症に特化した治療拠点「薬物依存症センター」（東京都小平市）を開設して1年余りが過ぎた。患者数は増加し、症状に応じた治療法を提案するなどして社会復帰を後押ししている。一方、薬物依存に対する誤解や患者への理解の少なさといった課題も依然として根強く、治療の普及の足かせにもなっている。

首都圏の医療機関に通院する男性（32）は5年前、仕事のストレスから違法薬物に手を染めた。仕事をクビになり、医療機関での治療を考えたが、相談した弁護士は「警察に通報される可能性がある」「治療しても依存症が突然に治るとは限らない」などと話した。

3年ほど病むうちに貯金は底がつき、男性は途方に暮れたが、友人を通して支援団体の職員と知り合うことができ、適切に対応できる医療機関を紹介してもらった。現在は通院を続けながら、この支援団体で働いている。男性は「適切な治療を受けることを知らず、依存を消したくても病院に足が向かない人も多いのでは」と話す。

国内には薬物依存症の治療を専門とする病院は少なく、専門的な知識を持つ医師もあまりいない。

NCNPは2014年以降、薬物依存症の治療を普及させる拠点として研究などに取り組んできた。活動を広く知ってもらうため、17年9月から専門の精神科医を常駐させ、治療法を開発しつつ国の医療機関に広げていく薬物依存症センターを開設した。

同センターでは松本俊彦センター長を含めた計5人の精神科医が対応している。今年1月時点の1カ月の新患数は約20人、再来患者数は1日50～60人程度で増加傾向にあるという。

回復可能知らず 患者への誤解も

依存度に応じ治療

最大の特徴は患者一人ひとりの依存度に合わせた多様な治療法。治療の中核にあるのはSMARPP（スマープ）と呼ばれる薬物依存症の集団療法で、松本センター長が中心となって06年に開発した。プログラムでは専用テキストを使って週1回90分ほどかけ自分の実体験や薬物を使いたくなる衝動の対処法などを書き込み、お互いに話し合う。

スマープを取り入れている医療機関は現在、同じ境遇の人同士で自らの思いを正直に話し合い、医師の指導を受けることで継続的な参加につながり、数カ月かけて依存の克服を目指している。

センター内での診察にとどまらず地域の回復支援施設などとも連携している。

選択肢を広げている。例えば比較的軽度の場合は通院によるスマープのほか、患者同士が定期的に集まって体験を語り合う地域の「自助グループ」への参加を勧める。一方、重症患者は通院が難しいため、地域の回復支援施設などを紹介している。

警察庁によると覚醒剤で摘発された人が再び摘発される再犯率は2017年時点で約60%。薬物依存症の患者はアルコールやギャンブル依存症に比べてトラブルを起こしやすいと考えられており、多くの医療機関は敬遠しがちなことが再犯の一因とみられる。

さらに医療機関が薬物に手を出した患者と捉えたときに警察などに通報すべきかどうかという点については国は明確な指針を設けていない。このため治療を続けたいという医師もいる。医師は刑法で守秘義務が課せられた人が再び摘発される再犯率は2017年時点で約60%。薬物依存症の患者はアルコールやギャンブル依存症に比べてトラブルを起こしやすいと考えられており、多くの医療機関は敬遠しがちなことが再犯の一因とみられる。

さらに医療機関が薬物に手を出した患者と捉えたときに警察などに通報すべきかどうかという点については国は明確な指針を設けていない。このため治療を続けたいという医師もいる。医師は刑法で守秘義務が課せられている。

覚醒剤の再犯、6割超
医療機関は敬遠しがち

薬物依存症センターはホームページで受診の申し込み方法などを紹介している

一般的な医療機関 ／ 薬物依存症センター

	一般的な医療機関	薬物依存症センター
治療法	◦依存度に関わらず一定期間入院など	◦依存度に応じた治療法の提案 ◦回復支援施設など地域の機関との連携
警察への通報	◦警察に通報すべきか明確な基準なし	◦原則として守秘義務を優先し、通報しない
専門性	◦専門知識のある医師が不足	◦専門的な精神科医が常駐 ◦新たな治療法の研究・開発

清原和博氏、厚労省の依存症啓発イベントに登場

2019.3.6 20:41
社会 ｜ 事件・疑惑

依存症の啓発イベントに出席した清原和博氏＝6日、東京都中央区（高橋朋彦撮影）